

持続可能な開発目標（SDGs）と関連付けた家庭科の授業づくり

～エシカル（倫理的な）消費の視点から～

Home Economics Classes Related to SDGs

～Perspective of Ethical Consumption～

有友愛子 ・ 和田早苗
Aiko ARITOMO Sanae WADA

要 旨

持続可能な開発目標（SDGs）と関連付けた家庭科の授業づくりとしてエシカル（倫理的な）消費に視点をあてた授業実践を行った。中学校家庭科の三年間の学習活動を通して、持続可能な方法で生産し、消費する取り組みを進めていくことが大切であることに気付き、自分自身の生活との関連性を見出していくことをねらいとして「エシカルなものづくり」をテーマとした授業をデザインした。本学の連携研究「エシカルラーニング ラボ」の取り組みとして行っている附属高等学校の生徒と本校生徒による異学年交流授業をエシカル消費の出会いの場とし、学校行事である二年生の林間学校、三年生の修学旅行と関連付けながら展開した。

ものづくりと関連付けた実践として、生徒が実際に手を動かして五感を活用した体験をしていくことで、さまざまな視点からの気付きを得ることができた。SDGs の目標を実現していくための具体的な消費行動であるエシカル消費を生徒が主体的に学んでいくために中学生段階として「エシカルなものづくり」をテーマとした授業デザインは有効であると考えられる。

キーワード : エシカル消費、持続可能な開発目標（SDGs）、ものづくり、異学年交流授業、ICT

I はじめに

令和3(2021)年度から施行されている学習指導要領では、技術・家庭科の家庭分野の改訂のポイントとして、社会の変化に対応した各内容の見直しについて説明がある。その中で「C 消費生活・環境」では、持続可能な社会の構築への対応として、計画的な金銭管理、消費者被害への対応に関する内容を新設、消費生活や環境に配慮したライフスタイルの確立の基礎となる内容の充実があげられている。これからの社会を作り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合っていくために求められる資質・能力について考えていくことが求められている中で、生徒がどのように社会や世界と関わり、よりよい人生を送るかについて考えていけるよう持続可能な開発目標（以下、SDGs）と関連付けた家庭科の授業づくりについて検討することにした。家庭科の様々な学習内容でSDGsと関連した授業づくりの可能性が考えられるが、本実践では消費生活・環境の学習内容とつながりが深いエシカル（倫理的な）消費の視点に着目することにした。

本学附属学校園では、附属高等学校の生徒と附属小学校の児童が異学年交流授業によるエシカル消

費の授業実践が平成28(2016)年度に先行研究として行われていた。附属小学校の児童が海外での児童労働の現状について附属高等学校の生徒から教わる学習に取り組んでいた。平成29(2017)年度にその授業実践に取り組んだ生徒が附属中学校に入学したことから、附属中学校においても異学年交流授業によるエシカル消費の授業実践を継続して行い、消費生活・環境の学習を軸としてエシカル消費に焦点を当てた授業づくりに取り組むことにした。その後、附属学校園の連携研究グループ「エシカルラーニングラボ」の取り組みとして、附属小学校と附属高等学校、附属中学校と附属高等学校の交流授業を毎年継続して行っており、エシカル消費に焦点を当てた授業づくりについて検証を行っている。ここでは、その授業実践について報告する。

II 実践の概要

1. エシカル消費と中学校家庭科の授業

エシカル（倫理的な）消費とは、地域の活性化や雇用などを含む、人・社会・地域・環境に配慮した消費行動のことを言う。持続可能な開発目標（SDGs）の目標達成のために消費者である私たちが行う消費行動がエシカル消費である。消費者庁が令和2年11月に発行したエシカル消費の啓発教材パンフレット『みんなの未来にエシカル消費』では、エシカル消費に特に関連するSDGsの目標が以下のように示されている。

[12] つくる責任つかう責任
[1] 貧困をなくそう [4] 質の高い教育をみんなに [8] 働きがいも経済成長も
[10] 人や国の不平等をなくそう [14] 海の豊かさを守ろう [15] 陸の豊かさを守ろう
[16] 平和と公正をすべての人に [17] パートナーシップで目標を達成しよう

家庭科の授業づくりでは、学習指導要領で示されている「C 消費生活・環境」の内容と関連が深いSDGsの目標「[12] つくる責任つかう責任」の他、上記のエシカル消費に特に関連するSDGsの目標と家庭科での学習や自分自身の生活とのつながりを見いだすことができることとして展開することにした。

2. 学習指導要領による位置付け

学習指導要領で示されている「C 消費生活・環境」の内容は全ての生徒が履修する。課題をもって、持続可能な社会の構築に向けて考え、工夫する活動を通して、消費生活・環境に関する知識及び技能を身に付け、これからの生活を展望して、身近な消費生活と環境についての課題を解決する力を養い、身近な消費生活と環境について工夫し、創造しようとする実践的な態度を育成することをねらいとしている。

特に、「エシカル消費」に関連する学習内容である「(2) 消費者の権利と責任」の内容では、家庭科の学習で育成を目指す資質・能力として「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」について以下のように示されている。

(2) 消費者の権利と責任
ア 消費者の基本的な権利と責任、自分や家族の消費生活が環境や社会に及ぼす影響について理解すること。
イ 身近な消費生活について、自立した消費者としての責任ある消費行動を考え、工夫すること。

内容の取扱いでは、内容の「A 家族・家庭生活」又は「B 衣食住の生活」の学習との関連を図り、実践的に学習できるようにすることとあり、総合的に展開できるよう配慮するよう記されている。

先に述べた、家庭科での学習や自分自身の生活とのつながりを見いだすことができることとして展開できるよう、「エシカルなものづくり」を軸として、「C 消費生活・環境」と「B 衣食住の生活」との学習を関連付けた授業づくりについて検討することにした。

3. 振り返りを重視した探究的な学習のカリキュラム・デザインとの関連

本校は、令和元(2019)年度から「振り返りを重視した探究的な学習のカリキュラム・デザイン ～自ら考え主体的に社会参画していく生徒の育成を目指して～」を研究主題として設定しており、研究のゴールを次のように設定している。

よりよい社会の実現に向けた課題発見・解決、探究のために必要な資質・能力を育成するために、CD 科の内容をカリキュラムに配置するとともに、「振り返りを重視した探究的な学習」を取り入れたカリキュラムをデザインし提案する。また、批判的思考や探究の楽しさを意識した「振り返りを重視した探究的な学習」のための指導・支援のあり方を、道徳を含む各教科、総合 CD などから提案するとともに、実践を通して自律した学習者へと生徒を育成していく。

技術・家庭科における探究に関わる配慮事項には、「生活の営みに係る見方・考え方や技術の見方・考え方を働かせ、知識を相互に関連付けてより深く理解するとともに、生活や社会の中から問題を見だし解決策を構想し、実践を評価・改善して、新たな課題の解決に向かう過程を重視した学習の充実を図ること」と記されている。

本校家庭科では、家庭科における探究的な学習に取り組むことが、生徒が主体的に自分自身の取り組みを振り返る場面、つまり、学習を「自分事」として捉える場面に繋がっていくと考える。そこで、「相手意識のある取り組み」として学校行事や総合 CD 等の学習や他学年との横断的な学習や「エシカル消費の視点を取り入れたカリキュラム」として主体的に社会参画していく姿勢を養うことを促す学習を設定することにした。

家庭科における「自らの学習を調整する姿」については、他者に表現することや伝えることで、生徒がそれぞれ考えていることが「自分事」として確かなものになり、対話的な活動を取り入れた相手意識のある表現活動が自らの学習を調整する姿につながると考える。

本校では、ICT の活用環境として、生徒一人一台 Chromebook が貸与されている。そこで、家庭科の授業において自らの学習を調整する手立てとしての ICT 活用を図 1 のように考えている。そのうち、本実践では、主に「一人一人が見ていたり、考えたりしているだけでは気づきにくい視点を他者の意見で調整できる」「同級生や他者に伝えるという表現活動により学習意欲の高まりや思考力・判断力・表現力の向上につながる」手立てとして取り入れた。

自らの学習を調整する手立てとしての ICT 活用

- 一人一人が見ていたり、考えていたりしているだけでは気づきにくい視点を他者の意見で調整できる。
- 思考ツールを目的に応じて活用することで、多面的に捉えた自己調整ができる。
- ウェアラブルカメラで自身の動画をメタ的に振り返ることで思考が整理され、学習の調整ができる。
- 同級生や他者に伝えるという表現活動により学習意欲の高まりや思考力・判断力・表現力の向上につながる。

図 1 自らの学習を調整する手立てとしての ICT 活用

4. エシカル消費を軸とした三年間の授業デザイン

中学校家庭科の三年間の学習活動を通して、持続可能な方法で生産し、消費する取り組みを進めていくことが大切であることに気づき、自分自身の生活との関連性を見出していくことについて検証することをねらいとして授業をデザインした。図 2 に示した通り、エシカル消費を軸としたものづくり

に関連する内容の三年間の授業を「エシカルなものづくり」をテーマとしてデザインした。一年生の学習内容として附属高等学校の二年生の生徒が中学校に来校して交流授業を行った。エシカル消費について、すごろくや寸劇等、工夫を凝らして附属高等学校の生徒が教えてくれる学習活動から「エシカルなものづくり」の授業がスタートする。その後、学校行事である二年生の林間学校、三年生の修学旅行と関連付けながら展開することにした。

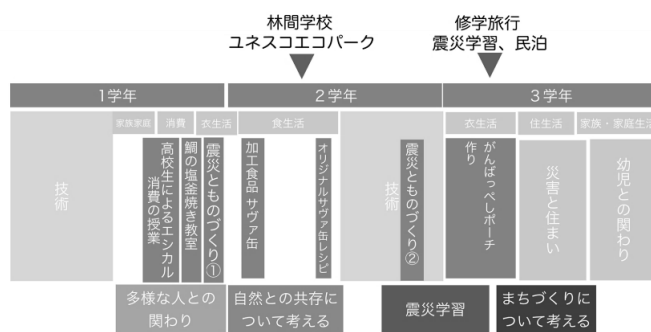


図2 エシカル消費を軸とした三年間の授業デザイン

エシカル消費を学ぶ際に、ものづくりと関連付けた展開とした理由は、生徒がより主体となった学習活動を通して、生活場面での実感を持ちながらさまざまな視点からの気づきを得て欲しいと考えたからである。生徒が主体的に社会参画していく姿勢を身に付けていけるよう、外部の方とのかかわりのある授業を展開した。

令和2(2020)年度は新型コロナウイルス感染症(以下、COVID-19)の感染防止措置のため、家庭科の年間指導計画の変更や学年行事の中止等の影響により、変更を加えながら展開することになった。遠隔学習期間に整備されたビデオ通話システム(Webex)を使用した取り組みを実施する等、想定していなかった学習活動の機会が得られ、今後の学習活動の可能性についても検討した。

III 授業実践の実際

ここでは表1に示した、「エシカルなものづくり」をテーマとした授業実践について、令和2(2020)年度の各学年の授業実践について報告する。「鯛の塩釜焼きづくり」については、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染防止措置により令和2(2020)年度は実施が叶わなかったため、令和元(2019)年度の実践である。対象はお茶の水女子大学附属中学校の令和2(2020)年度在籍生徒(1学年生徒108名、2学年生徒117名、3学年生徒108名)、令和元(2019)年度(1学年生徒117名)とする。

表1 「エシカルなものづくり」をテーマとした授業実践

	平成29(2017)年度	平成30(2018)年度	令和元(2019)年度	令和2(2020)年度	令和3(2021)年度
附属高等学校生徒からのエシカル消費の授業	1学年	1学年	1学年	1学年	1学年
小原木 My タコちゃんづくり		全学年	1学年	1学年	1学年
鯛の塩釜焼きづくり	1学年	1学年	1学年	(COVID-19)	(1学年)
サヴァ缶オリジナルレシピ			2学年	2学年	2学年
がんばっぺしボーチづくり			3学年	3学年	3学年

1. 附属高等学校の生徒によるエシカル消費の授業

(1)ねらい

附属高等学校の生徒によるエシカル消費の授業は、中学生が「エシカル消費」に出会う場として設定している。附属高等学校の生徒にとっては、エシカルな視点を養うために体験したことを他者に伝えることで「自分事」にするための場である。附属高等学校の生徒から「エシカル消費」について教わった後、「エシカルカード」作りを通して、教わったことを整理したり、中学生の立場として自分にできることを考えたりすることでエシカルな消費者としての一歩を踏み出す機会としている。「C消費生活・環境」の学習内容と関連が深いSDGsの目標[12] つくる責任つかう責任の他、上記のエシカ

ル消費に特に関連する SDGs の目標と家庭科での学習や自分自身の生活とのつながりを見いだすきっかけの場である。

(2) 実践の概要

平成 29(2017)年度から、附属中学校 1 学年生徒と附属高等学校 2 学年生徒の交流授業として行っている。附属高等学校の生徒が附属中学校に来校し、それぞれ半数の生徒が被服室と調理室に分かれて活動を行う。附属高等学校側は、附属高等学校家庭科担当教諭の指導のもと、授業の進行は附属高等学校の生徒が行った。導入とまとめは一斉学習として附属高等学校の生徒がプレゼンテーションアプリケーションで作成したスライドによるプレゼンテーションや寸劇、主な学習活動は授業内容に合わせて複数のグループに分かれたグループワークを行っている。中学生も高校生も交流授業が始まるまでは緊張している様子が毎年見られる。しかし、附属高等学校の生徒が用意してくれたプレゼンテーションや寸劇、すごろく等の教材は、どれも中学生が理解できるようにと工夫が凝らされたものであり、その気持ちが中学生に伝わり、和やかな雰囲気での交流授業が行われている。令和 2 (2020)年度は COVID-19 の感染防止措置の影響で附属高等学校の生徒が班ごとに用意してくれたビデオレターでの交流を行うことになった。授業の流れを表 2 に示した。

表 2 附属高等学校の生徒によるエシカル消費の授業実践の流れ

	学習内容
「附属高等学校の生徒によるエシカル消費の授業」 (1 時間)	・附属高等学校の生徒によるビデオレター (プレゼンテーション) の視聴
「附属高等学校の生徒によるエシカル消費の授業」の振り返り (1 時間)	・「自分にできるエシカル消費」について考える。 ・「エシカルカード」にまとめる内容を考える。 [→家庭での課題]
「エシカルカード」の共有 (1 時間)	・「エシカルカード」をデジタル化する。【ロイロノート・スクール】 ・「エシカルカード」を共有する。【ロイロノート・スクール】

ビデオレターのテーマを表 3 にまとめた。エシカル消費の他、班ごとに中学生に伝えたいテーマを考え、それぞれのテーマで 5～10 分のビデオレターを作成してくれた。中学生が衣生活の場面で自分たちができることを考えるきっかけとする具体例として、どの班も附属高等学校の生徒がエシカルをテーマに製作した服を紹介してくれるエシカルファッションショーのコーナーがあり、それぞれの製作の意図を視聴できた。

表 3 附属高等学校の生徒からのビデオレターのテーマ

A 組	B 組	C 組
エシカル消費 ソーシャルプログラム 伝統技術 天然素材 食品ロス フェアトレード	エシカル消費 アップサイクル 伝統技術 天然素材 フェアトレード ソーシャルプログラム	エシカル消費 フェアトレード アップサイクル 有機栽培 アニマルウェルフェア 伝統技術

中学生は、附属高等学校の生徒による授業の後、学習した内容の整理として「エシカルカード」の課題に取り組んだ。一人がスライドを一枚作成するイメージで課題を課し、「エシカルを実現するために今自分ができること」について考えさせている。お互いが作成した「エシカルカード」や実現のために考えたことは、Chromebook 一人一台端末環境でロイロノート・スクール (株式会社 Loilo) 等のアプリケーションを使って共有した。

(3) 実践の様子

附属高等学校生が作成したビデオレターから、中学生は「エシカル消費」について様々な視点からの学びを得ることができた。学びの内容はもちろんのこと、プレゼンテーションでの伝え方等、中学生では思いつかないことも多く、刺激を受ける様子が見られ、対面での異学年交流と変わらない交流授業を実施する意義を感じた。

生徒が作成した「エシカルカード」のテーマを図3に示した。フェアトレードを題材としたものが最も多く38%、次いでエシカル消費が14%、アニマルウェルフェアが11%という順であった。

実際に生徒が作成した「エシカルカード」を図4に示した。附属高等学校の生徒から学んだことを伝えるために情報を整理し、誰が見ても分かりやすいような工夫がなされている。また、関連するSDGsの目標を意識したり、いろいろなマークを調べたりしている様子が見えたと。

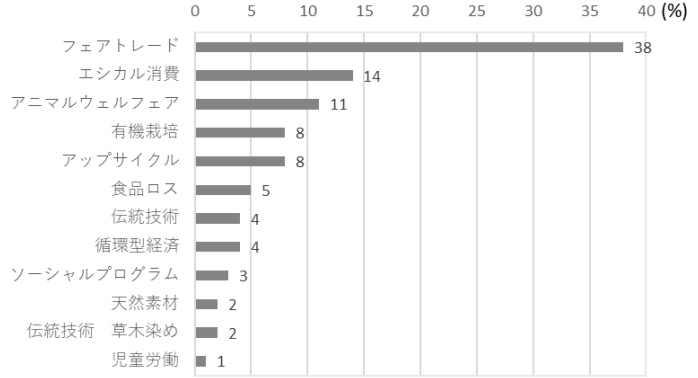


図3 生徒が作成した「エシカルカード」のテーマ



図4 中学生が附属高等学校の生徒から学んだことを整理した「エシカルカード」

ビデオレターでの交流だったため、中学生の様子を附属高等学校の生徒に直接伝えることができなかったこともあり、後日中学生の感想を附属高等学校の生徒に届けることにした。中学生からの感想のなかには附属高等学校の生徒への質問もあり、後日附属高等学校の生徒から質問への回答が届いた。対面での交流と比べるとタイムラグはあるが、三年間を通したテーマとしての取り組みだからこそ、時間を置きながらのやり取りがかえって生徒の学びを深めていくことにつながっていくのではないかなと思われる。附属高等学校の生徒の側も、中学生からの感想を見ながら他の班でどのようなビデオレターを作成していたのか、また、中学生がどのような感想を持ったのかを知ることができたようである。

2. 第1学年 小原木 My タコちゃんづくり

令和2（2020）年12月実施

(1) ねらい

本実践は、梅村マルティナ気仙沼 FS アトリエ（宮城県気仙沼市）で取り組んでいる、「みんなの笑顔をつなぐ 小原木（こはらぎ）タコちゃんプロジェクト」と関連した授業実践である。「小原木タコちゃん」は、被災地に直接行くことができなくても参加できる一つの支援の形である。



図5 生徒が作成したタコちゃん

「C 消費生活・環境」の学習内容として SDGs の目標「[12] つくる責任つかう責任」のうち、つかう責任に焦点をあて、消費行動と社会のつながりを示した「買い物は投票」をキーワードとして取り上げた。生徒に、消費者として一人一人の選択がよりよい商品を社会に流通させ、よりよい社会を築くことの大切さに気付かせ、「エシカル消費」について学習していく種まきの場として設定している。「小原木タコちゃん」の素材である Opal（オパール）毛糸（TUTTO 社）に着目して、環境に配慮した消費生活について SDGs の目標「[15] 陸の豊かさも守ろう」と関連付けたり、「B 衣食住の生活」の衣生活の学習に関連付けたりしていく授業展開とした。

(2) 実践の概要

小原木 My タコちゃんづくりの授業実践の流れを表4に示した。「毛糸にふれればみんなしあわせ」を伝えたいと言う梅村マルティナ氏の想いを受け取りながら授業実践に取り組んだ。東日本大震災での気仙沼の被害状況を確認し、東日本大震災により被災した女性の雇用支援や環境への配慮についてふれることで「買い物は投票」について考えさせてから「小原木 My タコちゃん」づくりに取り組み、お互いが作成したタコちゃんへの想いを共有した。

表4 小原木 My タコちゃんづくりの授業実践の流れ

	学習内容
「毛糸にふれればみんなしあわせ」を感じよう (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> 東日本大震災での宮城県気仙沼の被害状況を知る。 梅村マルティナさんの想いや取り組みを知る。 「買い物は投票」について考える。
「小原木 My タコちゃん」づくり (2時間)	<ul style="list-style-type: none"> 毛糸の束を8本に分け、三つ編みにする。 ボタン付け（必ず1カ所）等でデコレーションする。
タコちゃんへの想いを共有しよう (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> タコちゃんに込めた想いをまとめる。【ロイロノート・スクール】 タコちゃんと込められた想いを共有する。【ロイロノート・スクール】

自然災害の原因には様々な要因が考えられ、地球温暖化もその一つである。図6に示されているように、小原木タコちゃんプロジェクトの収益は温暖化防止の為の熱帯雨林保護活動に提供される。日本ではなくドイツの環境団体への寄付金になっている理由が、Opal 毛糸がドイツで作られていることにあることを知ることで、環境問題を地球規模で考える必要があることへの気付きにつながっていった。この気付きが、自分達の住む日本の環境だけ考えるのではなく、地球規模でSDGsの目標を達成していくことを大切にする視点につなげていきたい。

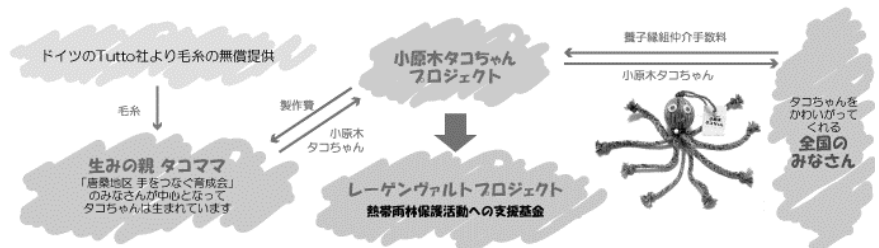


図6 小原木タコちゃんプロジェクトの収益の流れ

(3) 実践の様子

タコちゃんの足を一本一本三つ編みにする工程では、手を動かして作ることの楽しさを感じたり、色の組み合わせに目を向けたりしている様子が見られた。小学校での学習を振り返りながらボタン付けに挑戦し、毛糸のタコちゃんをみんな夢中でデコレーションした。生徒の様子を見てみると、コロナ禍で様々な活動が制限される中、実際に体験したり、経験したりする活動を生徒たちは求めていることを感じられた。

完成したタコちゃんはロイロノート・スクールのカメラで撮影し、「タコちゃんづくりに込めた想い」とセットにして、クラス内で共有し、その後の衣生活の学習に関連付けた。タコちゃんに込めた想いの内容(図7)と共有タイムでの友達からのコメント(図8)を以下に示した。

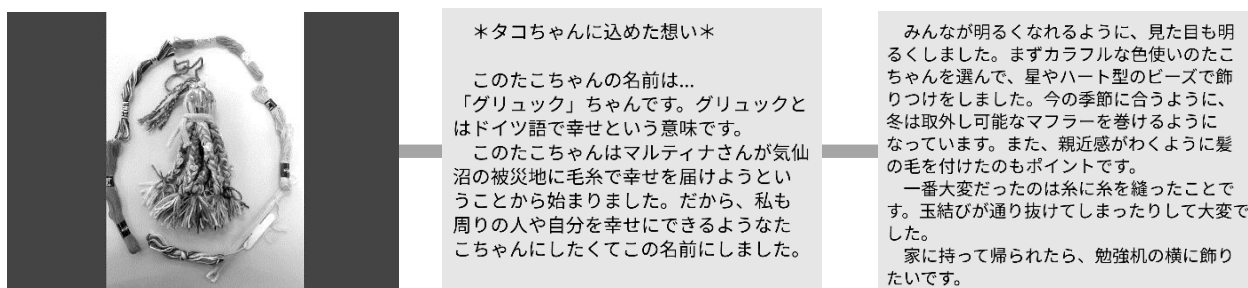


図7 タコちゃんに込めた想いのカード【ロイロノート・スクール】

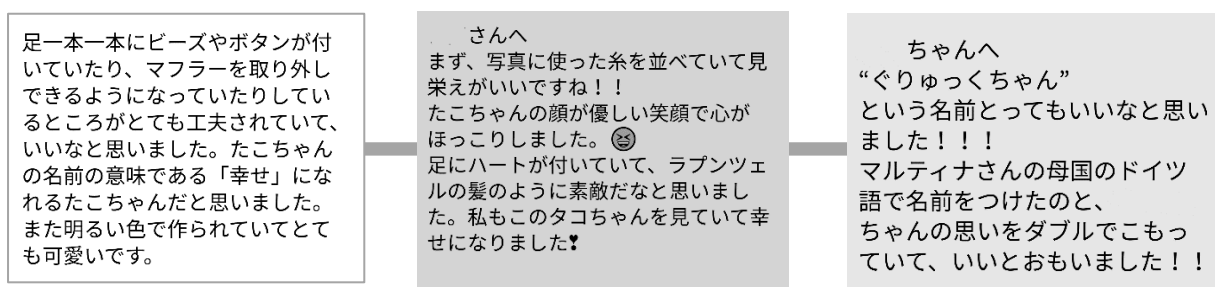


図8 タコちゃんに込めた想いの共有場面でのカード【ロイロノート・スクール】

タコちゃんに込めた想いのカードからは、生徒それぞれが思い思いにタコちゃんづくりを楽しむ様子、タコちゃんに名前を付けたり、マルティナさんの想いに共感する様子が見られた。また、友達からのコメントからも、タコちゃんに込めた想いが伝わった様子が伺え、友達からのコメントを楽しみながら読んでいた。

「小原木 My タコちゃんプロジェクト」授業後の生徒の振り返りの記録を以下に示した。

- 最近よく耳にするが、正直よく理解できていなかったフェアトレードについても理解することができた。自分が少し考え方を換え、買う物を変えるだけで救われる命があると思うと、なんだか不思議だなと思うと同時にすばらしいことだなあとも思った!
- 今回タコちゃんづくりで毛糸にふれてみて、この活動は本当にあたたかい気持ちになり、笑顔になれると思いました。また、一人で作るよりも誰かとつくった方が楽しいので、人との交流にもつながると思いました。
- 他の人のタコちゃんには、「被災地の方々には希望をもってもらいたい」という想いが見られました。中には、希望をタコちゃんの「目」で表現している人もいました。それを見て、私も希望をもってもらえるように募金などもして、積極的にかかわっていきなりたいなと思いました。

フェアトレードについての理解を深めていたり、人と人の関わりについて感じたりする様子がかがえた。SDGs の目標「[8] 働きがいも経済成長も」についての気付きも見られた。その後も、被服室に編み物コーナーを用意して毛糸にふれることができるようにしている。2時間続きの授業の合間に友達とおしゃべりをしながら手を動かすことを楽しんでいる生徒もいる。

2. 第1学年 鯛の塩釜焼きづくり 令和2(2020)年1月実施

(1)ねらい

本実践は、特別授業として卒業生でもある魚食を推進する団体である魚食普及推進センター（一般社団法人 大日本水産会）に所属している特別講師を招き、私たちの食生活が持続可能な社会の実現とどのように関連しているのかを伝統的な慶事の行事食である鯛の塩釜焼きづくりを通して、食の専門家としての視点から豊富な経験をもとに教えていただいている。

「C 消費生活・環境」の学習内容と関連が深い SDGs の目標「[12] つくる責任つかう責任」に関連付けながら、「[14] 海の豊かさを守ろう」や「[15] 陸の豊かさを守ろう」を中心に「B 衣食住の生活」の食生活の学習ではどのような SDGs の目標が関連し、私たちの生活とつながっているかに気付くことをねらいとしている。

「和食；日本人の伝統的な食文化」がユネスコ無形文化遺産に登録され、日本人の伝統的な食文化について見直し、和食文化の保護・継承の大切さについて考える日として11月24日が「和食の日」に制定されている。日本は海・山・里と豊かな自然に恵まれ、多様で新鮮な旬の食材を食してきたが、我が国における魚介類の一人当たりの消費量は減少を続けており、若い世代ほど摂取量が少ないという現状がある。しかし、水産庁が発表した「平成29年度水産白書」では、「水産物の価格が上昇傾向にある中で、購入量は減少しているものの、消費者の購買意欲自体が衰退しているわけではないとも考えられます」と分析している。若い世代である中学生に魚食推進について、SDGs の目標を意識しながら食生活について考えさせたい。

(2)実践の概要

鯛の塩釜焼きづくりの授業実践の流れを表5に示した。講師とは、事前に家庭科の食生活の授業でどのような学習をしているのか、また、今後どのような学習が展開されるのが、どのように考えて食材を選んで欲しいかについて打ち合わせを重ねた。また、必ず一回は大型の魚を触るように分担を分ける事で、特別なプログラムではなく、授業後自宅でも一尾の魚を購入して捌いてみようと思えるようプログラム内容を考えた。

表5 鯛の塩釜焼きづくりの授業実践の流れ

	学習内容
「鯛の塩釜焼き」について	・「鯛の塩釜焼き」が日本の伝統的な行事食であることを知る。
鯛の選び方・扱い方を知る	・天然魚と養殖魚の見分け方を知る。 ・水産エコラベルを確認する。 ・鯛の捌き方を確認する。
「鯛の塩釜焼き」づくり	・鯛を捌く。 ・塩釜焼きの下準備をしてオーブンに入れて加熱する。
「食材を自分で選ぶための考え方」のお話	・食材を自分で選ぶための見方や考え方を知る。
「鯛の塩釜焼き」の試食	・オーブンから塩釜焼きを取り出す。 ・教わったことを思い出しながら試食する。

(3) 実践の様子

塩釜焼きづくり

本実践は、講師自身が家族のお食い初めのために作った尾頭付きの鯛の塩焼きの紹介から始まる。尾頭付きには「人生の最初から最後まで」の願いが含まれるが、生徒たちは本実践の前に伝統的な食文化として郷土料理や行事食について学習しているため、既習事項を思い出しながら鯛の塩釜焼きについての想像を膨らませる様子が見られる。大きな鯛を目の前にして、本当に自分たちで捌き、調理することができるのか不安そうな様子も見られたが、いざ作業が始まると、班ごとに協力しあいながら手順に沿って作業を進める様子が見られた。

包丁を使わない手軽な魚の捌き方として、スプーンで鱗を取ったり、キッチンバサミで魚の腹を切ったりする方法を教わることで、中学生でも安全に1kgを超える立派な鯛を捌くことができた。講師から教わった新鮮な魚の見分け方として、鱗が魚の身にしっかりとついていることを確認したり、虹色に輝く様子を確認したりする様子が見られた。ここでの鮮度の確認の方法は、2学年の魚の調理の工夫の授業の際に振り返っている。また、魚が苦手な生徒は内臓を取り出す際には目を背けつつも、新鮮な魚の内臓は張りもあり美しいことを確認する様子も見られた。魚が苦手な

生徒がいる一方で、魚釣りが趣味で魚を捌くことが得意である生徒もおり、手慣れた手付きでアドバイスをしながら、自分なりの工夫を教える場面も見られた。また、環境に配慮したエシカルマークの一つである水産エコラベル（「養殖エコラベル（Aquaculture Eco-Label）」：愛南町は、現在は国際基準に合致した MEL（マリン・エコラベル・ジャパン）を取得済み）を実際に確認することができた（図10）。

鯛と塩の間に昆布を挟む作業では、鰹節と昆布の一番だしをとる実習の際に学んだ昆布のうま味の働きを振り返る様子も見られた。塩と卵白を混ぜる際に余った卵黄はデコレーションに使用する等、食品ロスに配慮していることを実際の作業を通して確認する様子が見られた。塩釜焼きが完成し木槌で塩釜を割り、塩分と昆布のうま味でおいしく仕上がった出来立ての鯛の塩釜焼きの試食の時間を楽しんだ。

実際に塩釜焼きを作ってみることで、鯛の1.5倍重量の塩の量の多さを実感することができ、この塩をそのまま処分するのはもったいないのではないかと気付きを投げかけてくる生徒もいる。食品ロスの視点だけで考えると課題ではあるが、ではなぜ鯛の塩釜焼きが日本の伝統的な行事食として食されてきたのかと生徒に問い、冷蔵庫がない時代の保存食で、塩をふんだんに使う贅沢な料理であり、ハレの日にだけ食することができる特別なものであることに気付かせる機会としている。

本実践後、機会を見つけて鯛の塩釜焼きに挑戦した生徒もいる。家庭のオーブンのサイズに合わせて小さめの鯛で挑戦したり、コロナ禍の休校期間中に挑戦したりした取り組みを、自主的な取り組みとしてノートに整理して報告してくれた生徒もいる。三年間の家庭科の学習のなかでも印象に残っている生徒や保護者も多く、家庭科の授業の懐かしい思い出として話題にあがることも多い。

講師の話

講師は、「鯛の塩釜焼」教室を通して、以下のことを生徒たちに考えて欲しいと考え、塩釜焼き作

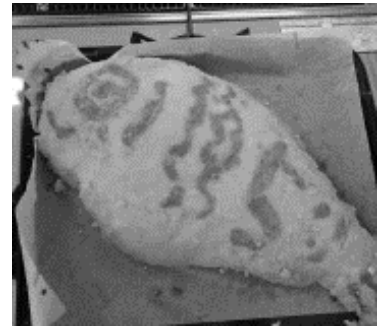


図9 生徒が作成した鯛の塩釜焼き



図10 鯛の塩釜焼きの手順

りと「食材を自分で選ぶための考え方」を生徒に伝えてくれている。

自分の体は、自分が食べたモノからしか作られません。
 そんな大事な食べるモノ。選ぶ時に何を大切に考えるかは人それぞれ。色々考えて選んで下さい。
 美味しさ以外にも料理や食材をしっかり見て楽しんで欲しい。
 そして、今後の人生で一度でも多く、楽しく美味しく幸せな食卓を囲んで欲しい！

講師が、日本の魚食文化を守るには、魚を食べる消費者と、元気な水産業界が共に存在しなければならないと考えているのは、これからの社会の担い手である若い世代に魚食に対する意識を高めていくことが求められているからである。塩釜焼きが焼けるまでの間での約 30 分の間に、食生活を SDGs の目標と関連付けながら、「食材を自分で選ぶための考え方」について次の内容を講師の経験をもとに話をしていた。

- ・ 鮮魚の選び方、骨の位置について
- ・ 食品の栄養、表示、原材料表示
- ・ 世界の魚類消費量と天然魚の漁獲量、養殖魚の生産量
- ・ 天然魚と養殖魚の特徴
- ・ 地球環境と漁業の工夫
- ・ 持続可能な開発目標と漁業：SDGs (Sustainable Development Goals)
- ・ 水産エコラベル
- ・ 食生活、文化、食糧資源の考え方
- ・ 消費者（みんな）が地球環境に対してできること

塩釜焼きづくりでは生鮮食品としての魚を扱っているが、ここでは缶詰や練り製品等で魚の加工食品について学習する。例として、ツナのオイル漬けでは、生活習慣病の予防にもつながる魚の脂質を有効活用し、オイルを排水溝に流さず環境への配慮も意識した調理として、オイルは炒めたり、ドレッシングに使ったりするなどの調理に有効活用するアイデアを紹介していただいた。また、東日本大震災後の風評被害で輸出量が減ってしまったホヤを国内で消費することで、被災地の応援につながることを教わった

また、日本では食す機会がないが海外では日常的に食べている意外な食品が紹介され、日本では食す機会がないものであっても、その土地や文化に根付いたものであり、それを食すことでその土地の人との心の距離が近づくという話題もあり、多様性について考えさせられる機会であった。

講師からの「消費者（みんな）が地球環境に対してできること」はどのようなことかとの問いに対して、生徒が授業後にあげた答え（一部）は次の通りである（図 11）。

<p>オイル上でそのまま食べてすぐ水が汚れる環境にやさしい！ さば缶の水煮の脂…全て魚の脂。水道には出すと良くない⇒いため 応援したい地域のモノを買う事が助けになる</p>	<p>海の豊さを守ると 陸の豊さを守ること にもつながる。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ スーパーに行った時はなるべく水産エコラベルのついた魚や貝を選ぶ。 ・ マイエコバックを持って買い物に行く。 ・ リサイクル商品を買う。 	<p>♀無理の範囲 し食べ物そのままだい 水を汚すはい プラス増やさない 無いです</p> <p>Reduce Reuse Recycle が大切</p>
<p>未来、今の自分のために行動がより 無理は、少ない</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 食べ物を残さない → 日頃の食生活を気をつける ・ 海の水を汚さない 残り物をアレンジして食べたりする！ ↳ プラスを捨てない

図 11 生徒が考えた「消費者（みんな）が地球環境に対してできること」

図 11 の内容から、本実践が食生活と SDGs の目標の関連について様々な視点を持つきっかけとなり、生活場面での実践につながる学びが多く得られた。生徒が一つ一つを理解していくには時間が必要ではあるが、本実践後の食生活の学習で学習したことを振り返る場となっている。

3. 第2学年 オリジナルサヴァ缶レシピ 令和3(2021)年2~3月実施

(1)ねらい

令和2(2020)年度は、COVID-19の感染防止措置として学校で調理実習を行うことができなかったが、状況を見ていつでも調理実習を行うことができるよう、肉や魚の調理の工夫や調理実習の手順についての学習は終えていた。そこで、加熱による食材の変化に着目させたり、災害時の備えとしてローリングストック法について意識させたりしながら、生徒が各自家庭でサヴァ缶を使った手軽な調理に取り組み、調理を工夫したり、食べたりすることで、食材に対する意識を高め、生活の場面での気付きの場を設定することにした。

「サヴァ缶 (= Ça va?缶)」は、「(一社) 東の食の会」と岩手県釜石市に工場をもつ「岩手缶詰(株)」と「岩手県産(株)」が東日本大震災の被災地からオリジナルブランドの加工品を発信しようとして開発した、国産サバを使用したオリジナルの洋風缶詰である。「Ça va?」はフランス語で『元気ですか?』という意味を持ち、「元気ですか?」と岩手から全国へ向けて声をかけるイメージで名づけられている。生徒にとって様々な視点での学びが得られると考え、教材として取り上げることにした。

「C 消費生活・環境」と「B 衣食住の生活」との学習を関連付けた展開とし、生徒が主体的に学習に取り組めるよう上級生からの学びを取り入れ、被災地復興応援事業として東北の方々と関わりの深い公益財団法人味の素ファンデーションに所属する栄養士の方との関わりの機会を設けることで社会への配慮についても考えられるようにした。

(2)実践の概要

オリジナルサヴァ缶レシピの実践は、令和元(2019)年度から取り組みをはじめた。令和元(2019)年度は、班ごとにレシピを考え学校で調理実習を行ったが、令和2(2020)年度は個人による家庭での取り組みにすることにした。実施期間は2月上旬から3月上旬までの間とし、レシピカードを Web サイトにまとめて生徒同士が相互評価を行ったり、下級生の学習につなげられるようにしたりした。表6に授業の流れを示した。

表6 オリジナルサヴァ缶レシピの授業実践の流れ

	学習内容
「オリジナルサヴァ缶レシピ」のガイドランス (0.5時間)	<ul style="list-style-type: none"> 東日本大震災での岩手県釜石市の被害状況や「サヴァ缶 (= Ça va?缶)」の取り組みを知る。 「買い物は投票」や「ローリングストック」について振り返る。 「オリジナルサヴァ缶レシピ」の取り組みを確認する。
「オリジナルサヴァ缶レシピ」づくり (家庭での取り組み)	<ul style="list-style-type: none"> 家庭でサヴァ缶を使った調理に取り組む。 学修支援システムからの情報を収集する。【Moodle】
「オリジナルサヴァ缶レシピ」を共有しよう (技術科:1時間)	<ul style="list-style-type: none"> 「オリジナルサヴァ缶レシピ」をまとめる。【Google サイト】 「オリジナルサヴァ缶レシピ」を共有する。【Google サイト】



図12 ワークシート

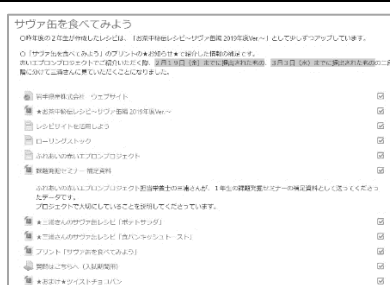


図13 Moodle 附属学校園で提示した補助資料



図14 上級生のサヴァ缶レシピ【Google サイト】

レシピカード (B6 サイズ) には、表面に①～⑤ (①コースと料理名、②この料理にした理由、③調理による食材の変化、④③以外に気付いたことや感想 (家族・自分)、⑤参考にした情報 (レシピ等)) を記入させ、裏面に作り方やできあがりの様子 (写真・イラスト) をまとめさせた。各自が持ち寄ったレシピカードは、技術科の時間の Web サイト作りの時間に Google サイトで一人一人 Web ページに編集し、お互いのレシピを共有した。それぞれのレシピを Web サイトにまとめることで「お茶中秘伝レシピ」シリーズとしてアーカイブ化し、下級生の学習につなげていくというねらいもある。

家庭での取り組みになるため、生徒が家庭から情報を得られるよう学修支援システム「Moodle 附属学校園」を活用した。「Moodle 附属学校園」には、図 13 に示したように、サヴァ缶を製造している食品会社の公式サイトや令和元(2019)年度の取り組みの一例を紹介し、生徒が家庭からアクセスし参考にできるようにした。

第三者からの評価として、東北の仮設住宅等で料理教室を主催している公益財団法人味の素ファンデーションに所属する栄養士の方に生徒のレシピを見ていただくことを伝えた。

(3) 実践の様子

生徒が実際に作ったレシピは以下のように簡単なものから手の込んだものまで様々であり、家族のアドバイスを得たり、家族からの評価が励みになったりした様子が見られた。

サヴァ缶トマトピザ、サヴァ缶とキャベツのペペロンチーノ、サヴァ缶グラタン、サヴァ缶のトマトソースドリア、サヴァ缶の4食丼、サヴァでブルスケッタ、サバと大根の煮物、サヴァトースト、ブロッコリーとさばのアヒージョ、ブロッコリーとサヴァ缶の蒸し物、サヴァ缶を使ったパエリア、サヴァ焼きそば、サバトマトカレー、サヴァじゃが、サヴァのガーリックチャーハン、サバのマリネサラダ、イタリアンリゾット風炊き込みご飯、サヴァ缶クラッカー、スパイシーサバ缶のブルスケッタ、サヴァ缶スティックパイ、サバマヨサンドイッチ、サバのみぞれあんかけ、サバそばろ、ドライカレー、サヴァ缶のバインミー、サヴァ缶リエット等

これまでも、家庭での調理の課題は毎年行っていたが、今回のサヴァ缶レシピの取り組みは課題の後に生徒から様々なエピソードを聞く機会が多かった。課題では1つを紹介することとなっていたが、複数の調理に挑戦し、自主的な取り組みとして追加で報告してくる生徒が多くみられた。また、手軽な調理に取り組んでみたという生徒も多く見られた。その後につながっていった理由として、生徒がより主体的に取り組むことができた現れであるのではないかと考える。

SDGs の視点としては、以下に示したように1学年の鯛の塩釜焼きづくりで学習した、環境に配慮した調理の工夫が見られた。

- ・私が選んだ味が「レモンバジル味」だったので味付けをあまりしないで、本来の味を上手に引き出せる調理をしよう！と考えたのでパスタにしてみました。また、パスタの中でも私は「レモンバジル味には**オリーブオイルなどの油分が多いのではないかと考えたので、その油分を出来る限り無駄なく美味しいパスタにできるように野菜などの具材を少なくして、さばの味を楽しめるペペロンチーノ**にしました。
- ・炊いたらおいしいと思ったから。**洗い物を減らしたかったから。**

また、「②この料理にした理由」「③調理による食材の変化」「④気付いたこと・感想」には、1学年で学習した五感を活用して味わう学習の取り組みを生かした表現も多く見られた。これまで学習したことや家庭での経験を生かしながら取り組んだ様子が見られた。

生徒が作成したレシピカードを図 15 に示した。図 15 の「サバニラの卵炒め」は、栄養士の方が、「1. 家庭にある身近な食材、調味料で簡単にできること、2. 高齢の方に不足しがちなたんぱく質と緑黄色野菜と一緒に摂れること、3. 一般的なさばの水煮缶でも代用できそうなこと」の3つの条

件に合ったレシピとして選んでくださったレシピである。この条件にあったレシピは、被災地の社会福祉協議会や自治会を通して仮設住宅で生活をされている住民の方に届けられる「おうちごはん 献立レシピ」(図16)に取り上げていただき、Web サイトにも掲載されている。「献立レシピ」には、「サバニラの卵炒め」の他に、「焼きさば(サバ缶を使った焼きそば)」と「さばの押し寿司」も掲載され、仮設住宅で生活をされている方からの質問のお便りに答えることを目的として開設された公式 YouTube チャンネルでも取り上げていただいた(図17)。中学生の取り組みを学校外の大人の方が見て、評価して下さるといことが取り組みの意欲の高まりに繋がった生徒も多く見られた。

生徒同士は、技術科の時間にそれぞれのレシピカードを Google サイトにまとめ、お互いのレシピカードを見合った。自分と同じようなレシピの友達がどんな工夫をしているのかを見たり、なるほどこんな調理もできるのかという発見をしたりという場となっていた。「お茶中秘伝レシピシリーズ」の一つとして下級生に受け継がれるレシピとして、このレシピサイトを下級生の学習に活用することを伝えた。

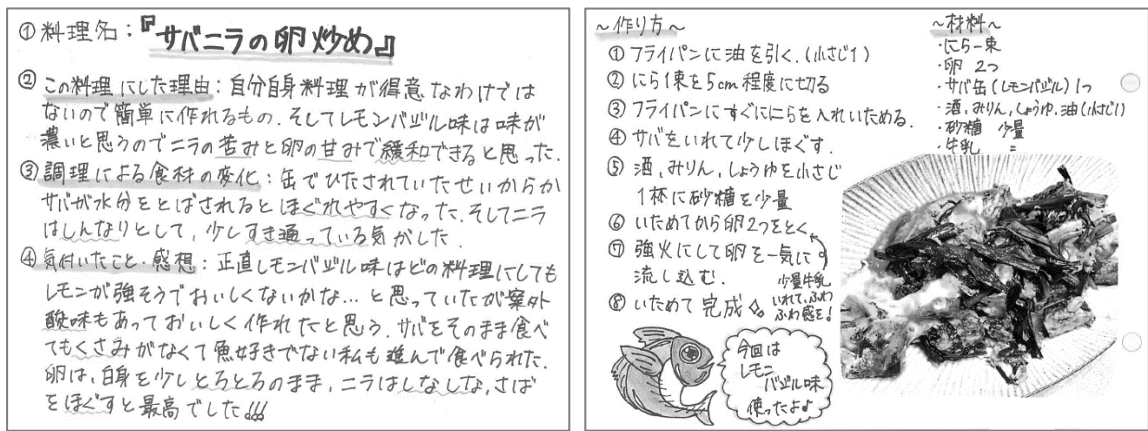


図15 生徒が作成したレシピカード



図16 生徒のレシピが掲載された「献立レシピ」



図17 生徒のレシピが紹介された動画

生徒の中には、鯖や鯖の缶詰に対する苦手意識があったが、実際に自分で作って食べてみると臭みもなく美味しかったという生徒も少なくはなかった。生徒が調理を実践することで、1学年の鯛の塩釜焼き教室での魚食推進への気付きを得ることができた。

4. 第3学年 がんばっぺしポーチづくり 令和2(2020)年9月～令和3(2021)年1月実施

(1)ねらい

安価で簡単に布製品が手に入る時代だからこそ、ものづくりを通してエシカル消費について考える学習に取り組むことにした。

「がんばっぺしポーチ」とは、宮城県の特定非営利活動法人南三陸ミシン工房の商品の一つである。南三陸ミシン工房は、東日本大震災で被災した女性たちがミシンを仕事や生きがいにしていくために立ち上げられた団体である。「がんばっぺし」は東北地方の方言で、「私はわたしの場所で。あなたもあなたの場所で。それぞれ、がんばっていきましょう」という想いが込められている。工房の縫い子さんが、中学生でも縫いやすいように工夫してくださり、裏地付きのマチのあるポーチを教材として提供していただいている。本校の三年生は修学旅行で東北を訪ねて震災学習をするため、東北に想いを寄せながらポーチを製作することで、人や社会への配慮についても考えていくことをねらいとしている。

令和元(2019)年度から実践を始め、イギリスのファブリックブランドのカーテン生地や京都の芸術大学の学生がデザインした工房オリジナル柄の生地等、多くの魅力的な生地の中から好みの生地を選んでいるが、今年度は宮城県の伝統的な綿織物である若柳地織の生地も加わり、伝統工芸にふれることができる機会になっている。

(2)実践の概要

がんばっぺしポーチづくりの授業の流れを表7に示した。実際にポーチ作りに取り組む前の二年生の1月に特別時間割期間に家庭科特別授業として「ミシンとともに復興を歩む」をテーマとして、南三陸ミシン工房の代表の方に講演をしていただき、東日本大震災の際の宮城県南三陸町の被害状況や工房を設立した意図について教えていただいた。その後三年生になりポーチ作りに取り組んだ。令和元(2019)年度は9月の生徒祭での展示に合わせて4月からポーチづくりに取り組んだが、今年度はCOVID-19の感染防止措置のため9月から製作に取り組んだ。

表7 がんばっぺしポーチづくりの授業の流れ

実施時期		学習内容
2年生1月	家庭科特別授業「ミシンとともに復興を歩む」 (1時間)	・東日本大震災での宮城県南三陸町の様子や工房の設立の意図についてうかがう。
3年生4～9月 (9～1月)	「がんばっぺしポーチ」づくり (6時間)	・ポーチを製作する。
3年生9月 (2～3月)	「がんばっぺしポーチ」の共有と振り返り	・お互いの作品を共有する。

ポーチづくりでは、ミシンの扱い方や被服製作の基礎的、基本的な技能を確認しながら作業を進めた。生徒それぞれのペースで作業を進めていけるよう、Google スライドで作成した作業手順を Google サイトに整理したデジタルテキストを、一人一人のChromebook 上で視聴できるようにした。



図18 Google サイトで作成したデジタルテキスト

(3) 実践の様子

苦勞して完成したポーチは、生徒が想像していたよりも完成度が高く、達成感も高い様子がうかがえる。これは「使える！」という声も多く、友達に羨ましがられたり、愛着のあるものとして日常遣いをしながら大切に使用していたりする報告もある。その他、生徒の授業後の振り返りの記述からは、以下のように作る側になってはじめて分かったことやポーチに込められた復興への想いや願いに気付くことができた様子が見られた。

がんばっぺしポーチを実際に作り、1つのポーチを作ることがすごく難しいことがわかった。布がきれいに合うように丁寧に印をつけなくてはいけないし、ミシンを使っていてもきれいに縫うことはとても難しいことだとわかった。南三陸ミシン工房の方々がきれいなポーチを短い時間でたくさん作れていることの凄さを身を持って知ることができた。

今回使ったポーチは卒業しても活用していきたいと思った。私は普段あまり手作りのものを使うことがなく、買ったものをいつも便利に使わせてもらっているけれど、自分が作る側になると当たり前のように存在している製品がどれだけの苦勞を経て私のところへ来ているかが感じられた。これからも物を大切にしていきたいと考えさせられた。また機会があれば、手作りのものを作りたい。

全体的にこのがんばっぺしポーチ作りはとても楽しくスムーズに進行できたと思います。がんばっぺしポーチを作る前の南三陸ミシン工房の方の話聞いて震災直後でのポーチ作りは被災地の方々の楽しみであったということがこのポーチを作っていく上でわかりました。

昔、1回ファスナーつけをしたことがあったけれど、一人で全行程を行うのは初めてだったのでとても楽しかった。形も可愛くでき、また丁寧に縫うことができたので良かった。実際に小学校6年生のときに岩手の被災地に行ったときは、南三陸のミシン工房を知らなかったのでコロナが収束したら足を運びたいと思う。

あと少しで、東日本大震災から、10年が経ちます。時間とともに震災の記憶は風化していってしまいますが、このポーチを見て震災のことを忘れないようにしたいです。また、家でもがんばっぺしポーチを作りたいと思いました。

今回、私が体験したポーチ作りが南三陸地域を救った活動であることを心に留めて、一生懸命制作に励むことができました。(中略) 小さな活動が、地域や人々を救い、楽しみを与えられる存在になっていることがすごいなと思いました。また、家でもポーチや他のものを作りたいと思いました。

実際の商品と同じものを作っていく工程を通して、SDGsの目標「[12]のうちの責任」について考えていくことができ、つくる責任について実感を持った気付きを得る様子が見られた。安価な製品は一体どこで、だれが、どのように作っているのだろかということを生徒同士が議論？する様子がよく見られた。SDGsの目標でいうと[12]の他、[1][4][10][16]に関連する内容について意見し合う様子が見られた。社会科の公民分野でエシカル消費について学習していることもあり、そのような視点での議論ができたのだと考える。

また、宮城県の伝統工芸である「若柳地織」の生地で作成したポーチはやわらかい触り心地でイギリスのファブリックブランドのカーテン生地や工房のオリジナル柄の生地とはまた違った味わいのある



ポーチに仕上がった。完成したお互いのポーチを見比べ、上手くできているところを見つけ合う様子が見られ、その際、「若柳地織」の生地のポーチのやわらかい手触りに気付き、改めて伝統工芸の凄さを感じる様子も見られた。自分の手で作り上げたからこそその気付きとその共有を生徒が主体となって行う場面が多く見られた。

図 19 生徒が作成した「がんばっぺしポーチ」

IV 考察と課題

1. 授業デザインについて

ものづくりと関連付けた実践として、生徒が実際に手を動かして五感を活用していろいろなことを体験していくことで、さまざまな視点からの気づきを得ることができた。中学生段階としてSDGsの目標を実現していくための具体的な消費行動であるエシカル消費を生徒が主体的に学んでいくために「エシカルなものづくり」をテーマとした授業デザインは有効であると考えられる。

令和2年度は学年行事がなく、修学旅行や林間学校と関連付けた取り組みとしての効果は検証できなかった。しかし、附属高等学校の生徒によるエシカル消費の授業を導入として行うことで、中学生が「自分事」としてエシカル消費として自分にできることを考えたり、友達の見聞を聞いて視野を広げたりする様子が見られた。

一年生では、種まきの時期として附属高等学校の生徒による交流授業を含め、授業実践の期間が短い授業を複数回実施した。二・三年生では、学校行事等と関連付けて授業実践の期間を長くとり、じっくり取り組めるようにした。種まきの時期と学びを深めていく時期のバランスは適当であったと感じている。学習したことを「自分事」にしていくために、生徒同士で共有したり、調理をして家族からの評価を得たりする場を設けているが、異学年交流として中学生も「自分事」にしていくために、アウトプットする場を検討していきたい。

「C 消費生活・環境」と「B 衣食住の生活」の学習を関連付けることで、生徒の主体的な学びを促すことができたが、資質・能力の高まりを支える学習評価として「B 衣食住の生活」としての評価と「C 消費生活・環境」の評価をそれぞれどのように見取っていくのかが今後の課題である。生徒が自らの成長を確認していくことで「自分事」の内容が深まり、学習を通してできるようになったことや分かったことを自然と生活に生かすことができるようになるように考える。そのための評価方法について今後検討を重ねていきたい。

三年生になった生徒が、公民の授業でエシカル消費についての学習で家庭科の学習を振り返る様子が見られると授業担当者が教えてくれた。家庭科のファイルの中から附属高等学校の生徒からもらったエシカル消費に関するパンフレットを確認している生徒もいるようである。また、家庭科の家庭学習である自主的な取り組みとして図20に示したように「笑顔を繋ぐカップケーキ」作りに挑戦した生徒もいた。取り組みの感想には、「今回は、丁度社会の公民の授業でエシカル消費について学んでいて、家庭科でも学んだことを思いだし、このレシピを思いつきました！家族に食べてもらったところ、笑顔で美味しいと言ってくれてカカオの国の子どもたちの笑顔（スマイル）を繋ぐことができたなあと嬉しくなりました」とあり、生徒自身が

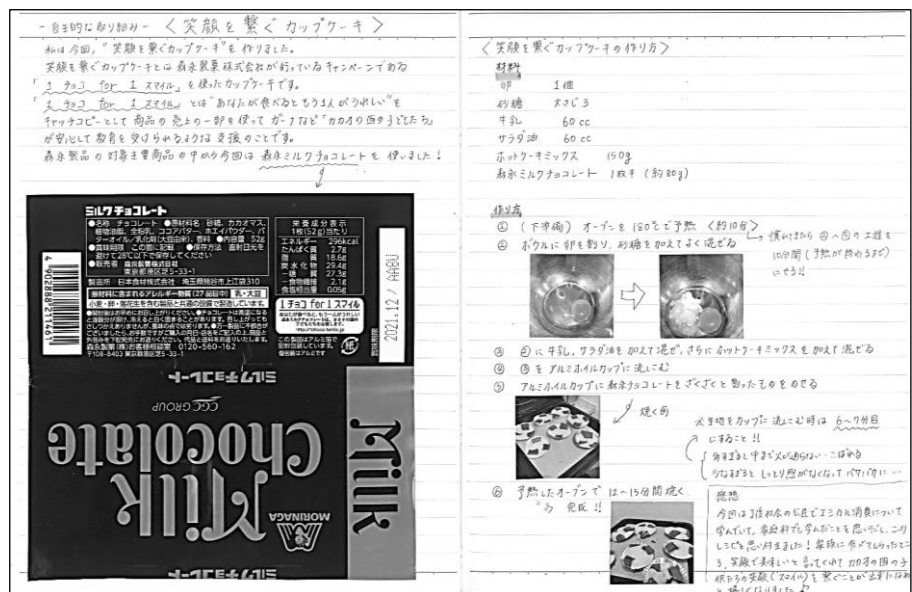


図20 生徒の自主的な取り組みのノート＜笑顔をつなぐカップケーキ＞

エシカルなものづくりの学習を通して持続可能な社会の実現に向けた一歩を踏み出した様子が見られた。この生徒は、小学校でも附属高等学校の生徒から児童労働について教わっており、家庭科の学習としてフェアトレードチョコレートを使ったお菓子作りに挑戦している。このように、生徒自身が自ら教科横断的な学びを深めたり、これまでの学習を関連付けていったりするきっかけになる授業づくりに取り組んでいきたい。

2. 持続可能な開発目標(SDGs)との関連

中学校入学までの家庭や学校での経験や学びから、環境への配慮に対する理解が高い生徒が多く見られる。そこで、持続可能な社会を残していく相手がいることに気付けるよう、家族や地域、そして社会との人と人とのつながりを意識させることを大切にしたい授業づくりに取り組んだ。SDGsの目標「[12] つくる責任つかう責任」について、消費生活・環境の学習内容として持続可能な方法で生産し、消費する取り組みを進めていくことの重要性に、生徒が主体となった学習活動を通して少しずつ気付かせ、自分自身の生活との関連性を見出させていくことを中学校段階での目標としているが、意識付けという点では今後さらに検討が必要である。先に述べたように、環境問題に関連する目標との関連については生徒自身の気付きにつながりやすいが、フェアトレード商品の購入だけではなく、「小原木タコちゃんプロジェクト」や「がんばっぺしポーチ」づくりを通して、今自分達がつけているものを通して人と人がつながっていることに気付かせ、SDGsの目標である「[12] つくる責任・つかう責任」や「[14] 海の豊かさを守ろう」、「[15] 陸の豊かさを守ろう」以外の目標についても目を向け、生徒が社会や世界に視野を向けるためのきっかけにつなげるため、状況に応じた授業展開を工夫していきたい。

本校では、教材を選択する段階でエシカル消費の視点を取り入れているが、生徒は「エシカル消費」をしているという特別な行動ではなく、選択肢の一つとして自然に受け止めている。特に、令和2(2020)年度の3学年の生徒は三年間を通して、毎年エシカル消費の視点を取り入れた家庭科の学習活動に取り組んできたため、あくまでもものづくりの選択肢であるという捉え方をしている生徒が多く見られた。「がんばっぺしポーチ」づくりでお世話になった南三陸の方々にメッセージを届ける際、「きれいなものができて嬉しかった」「生地をありがとうございます」という内容のものが多かった。一方で、社会科の公民的分野の消費生活についての学習内容では、エシカル消費について視点をあてた発言や取り組みも見られたようで、教科横断的な学びの深まりにつながった様子がうかがえた。

実際に修学旅行で東北地方を訪れ、震災学習に取り組んだ令和元(2019)年度の3学年の生徒は、ポーチ作りの苦労や感想の他に、東北への想いを込めた生徒が多く見られた。東北を訪れて感じたこと、民泊先の家族への想いがあるからこそそのメッセージが見られたことが印象的であった。中学生段階の生徒が選択肢の一つとしてのSDGsの目標「[12] つくる責任つかう責任」だけではなく、「[8] 働きがいも経済成長も」の視点として、被災地の雇用についての視点や「[10] 人や国の不平等をなくそう」等の視点まで視野を広げていくには、実際に足を運んでみることで気付きやなにより民泊先のご家族との時間の中で感じたことが心に強く残っていることが大きく影響していると考えられる。COVID-19の感染防止措置の影響で、東北地方での震災学習が叶わない中での授業展開を検討していきたい。

一年生の家庭科学習のガイダンスでSDGsと家庭科の学習の関連についてふれたところ、SDGsに興味を持ち、自主的な取り組みとして「SDGsノート」を作成し、家庭科の学習と関連付けた取り組みを

継続して行っている生徒がいる。学校で学習したことと自分自身の生活を関連付けながら SDGs について学びを深めているが、それほど意識をしていない生徒も少なくはない。中学校段階では、家庭科の学習として SDGs と関連付けた学習として学んだことが SDGs の目標達成に向けての視点の理解の深まりに直結し、すぐに生活に生かして実現していけるのではなく、取り組みを重ねていくことで気付きが深まっていく段階であると考えている。一つ一つの取り組みは印象に残っていることも多いが、SDGs と関連付けたつながりになっているかと言うと必ずしもそうではないことから、家庭科で学習していることはもちろんのこと、自分達の生活そのものが SDGs に関連する行動であり、選択であることに気付き、高等学校での学習につなげていきたい。

3. 授業づくりの可能性

本校のように地域の学校ではなく、様々な地域から集まってくる生徒が学んでいるからこそ、学校行事として訪れる予定の地域と関連のある授業を展開していくことを意識した展開とした。本実践では、特に東北地方に焦点をあて、三年生の修学旅行での震災学習に関連付けて展開したが、その中で、被災地支援であっても、さまざまなきっかけや関わり方があり、これからの方向性についてもさまざまであることを知ることができた。伝統工芸を通して先人の知恵を学んだり、日本のみならず地球規模での環境問題について視野を広げていくことに気付かされたりした。また、持続可能な活動であり続けるための工夫についても実際の取り組みを通して知ることができた。家庭科の学習に留まらず、教科横断的な学びにつながる要素が多くある。SDGs については、2030 年までの目標としてこれから教科横断的な学びのテーマとして生徒がより深く学んでいくことになるが、そのような中で家庭科としてどのように関わっていくことが生徒の学びを深めていくのかについて検討していきたい。

ICT の活用として、生徒同士の学びの共有の場面でロイノート・スクールや Google サイトを活用することで、自らの学習を調整する手立てとしての ICT 活用のうち「一人一人が見ていたり、考えていたりしているだけでは気付きにくい視点を他者の意見で調整できる」という手立てとして有効であった。Google サイトでは、デジタルアーカイブとして他のクラス、他の学年の生徒との学びの共有を実現することができ、「同級生や他者に伝えるという表現活動により学習効果の高まりや思考力・判断力・表現力の向上につながる」という点での効果が見られた。Google サイトによるデジタルテキストや学修支援システム Moodle を使用することで、さまざまな情報を生徒が状況に応じて選択、活用することができた。生徒一人一台端末環境を生かした活用方法について検討していきたい。また、ビデオ通話システム（Webex）を活用することにより、東北の南三陸ミシン工房の方々からビデオメッセージをいただいたり、お礼の言葉を届けたりする機会を設けることができた。また、関わりのある方々が発信している動画を授業に取り入れたり、生徒の取り組みを発信していただいたりもした。学校外とのつながりを実感できる活動を取り入れることで、生徒の主体的な社会参画に対する興味・関心や意欲の高まりにつなげていきたい。

V まとめ

学習を通して、知識や技能を身に付け、実際に手や身体を動かして体験することで感じたことや気付いたことを糸口に、豊かで楽しく、心地よい生活を目指して次の世代につなげていって欲しい。そのために、相手意識のある学びの場を作ることを心がけていきたい。

2030 年の SDGs のゴールの先に何を見ているのか、何が見えるのか、自分自身はどのような価値観で

消費者として生活を営んでいきたいのか、高等学校での家庭科の学習につなげていくために、中学生が附属高等学校の生徒から教わったように、中学生も誰かに伝えていくことでより「自分事」として欲しいと考えている。これからの社会を共に生きていく若い世代同士、異学年交流を通してお互いの学びを深めていって欲しいと願っている。

日々、授業者として生徒と共にいる家庭科の教員は生徒の様子を見取りながら学びをサポートする伴走者であり、伴走者以外の附属高等学校の生徒や卒業生、外部講師の方々からの教わったことや共に体験したことは生徒の学びへの影響が大きいからこそ、学校行事をはじめ、生徒の家庭科以外の学校生活と関連付けた授業をデザインしていくことは「自分事」としていくために重要であることを感じた。

令和3(2021)年度は、附属小学校の家庭科の授業で附属高等学校の生徒から児童労働について教わり、さらに、中学校一年生の時に附属高等学校の生徒からエシカル消費について教わった附属高等学校二年生の生徒が中学生にエシカル消費について教える交流授業を行う予定である。生徒達がどのように「自分事」としていったのか、そして中学生にどのようなことを伝えてくれるのかを楽しみにしている。

謝辞

梅村マルティナ気仙沼 FS アトリエ株式会社、一般社団法人 大日本水産会 魚食普及推進センター、公益財団法人味の素ファンデーション、特定非営利活動法人 南三陸ミシン工場の皆様には、生徒の学習活動において多大なるご協力をいただきました。ここに深く感謝申し上げます。

【引用文献・参考文献】 URL の参照は全て 2021 年 5 月 23 日

荒井紀子, 高木幸子, 石島恵美子, 鈴木真由子, 小高さほみ, 平田京子: SDGs と家庭科 カリキュラム・デザイン, 教育図書株式会社, 2020 年

中学校学習指導要領 技術・家庭科 家庭分野の改訂のポイント: 新学習指導要領編 No21:

<https://www.nits.go.jp/materials/youryou/021.html>, 独立行政法人 教職員支援機構

笑顔つなげる小原木タコちゃんプロジェクト: <https://www.kfsatelier.co.jp/takochan/index.html>, 梅村マルティナ気仙沼 FS アトリエ株式会社

Hang in there: <http://www.mishinkoubou.org/hanginthere.php>, 特定非営利法人 南三陸ミシン工房

被災地復興応援事業 (東北復興応援 健康・栄養セミナー「ふれあいの赤いエプロンプロジェクト」):

<http://www.theajinomotofoundation.org/akaepu/>, 公益財団法人味の素ファンデーション

岩手から Ça va?: <https://www.iwatekensan.co.jp/cava/>, 岩手県産株式会社

じいじの簡単クッキング (さば缶を使ったレシピ): [https://www.youtube.com/watch?v=-EWo0Agb-](https://www.youtube.com/watch?v=-EWo0Agb-c&list=PLCijxKAP8cpiRhioKnQlodTwutUS9v7j4&index=3&t=348s)

[c&list=PLCijxKAP8cpiRhioKnQlodTwutUS9v7j4&index=3&t=348s](https://www.youtube.com/watch?v=-EWo0Agb-c&list=PLCijxKAP8cpiRhioKnQlodTwutUS9v7j4&index=3&t=348s), 公益財団法人味の素ファンデーション

文部科学省: 中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 技術・家庭編, 開隆堂出版株式会社, 2018 年

お茶の水女子大学附属中学校教育研究会: 令和元年度 教育研究協議会研究紀要「振り返りを重視した探究的な学習のカリキュラム・デザイン」, 2019 年

お茶の水女子大学附属学校園 連携研究 エシカルラーニングラボ:

<https://www-p.fz.ocha.ac.jp/renkei/ethicallearning.html>, お茶の水女子大学

おうちごはんレシピ (番外編さば缶を使ったレシピ):

<https://www.youtube.com/watch?v=KYZmCkyG4hQ>, 公益財団法人味の素ファンデーション

「水産白書」(2) 水産物消費の状況: https://www.jfa.maff.go.jp/j/kikaku/wpaper/h20/pdf/h_1_2_1.pdf, 水産省

食育・環境学習事例: <https://osakana.suisankai.or.jp/shokuiku/shokuiku/page/2>, 一般社団法人 大日本水産会 魚食普及推進センター

「和食」がユネスコ無形文化遺産に登録されました! <https://www.maff.go.jp/j/keikaku/syokubunka/ich/>, 農林水産省